The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	化学療法による遷延性嘔気の軽減に対する足浴後マッサージの有効性
Author(s)	新田, 紀枝
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/1199
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【1】

氏　　名	新　田　紀　枝（にった　のりえ）
博士の専攻分野の名称	博　士（保健学）
学　位　記　番　号	第　18977　号
学位授与年月日	平成16年7月14日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 医学系研究科保健学専攻
学　位　論　文　名	**化学療法による遷延性嘔気の軽減に対する足浴後マッサージの有効性**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　阿曽　洋子 （副査） 教　授　小笠原知枝　　教　授　三上　　洋

論　文　内　容　の　要　旨

【目　的】

化学療法における嘔気・嘔吐は、がん患者にとって最も厄介と認知されている副作用であり、患者のQOLを低下させる原因になる。肺がんに有効とされるシスプラチン製剤（CDDP）は、最も催吐性の強い抗がん剤である。CDDPによる急性嘔気・嘔吐に対しては、嘔吐の発生機序が解明されて、有効な制吐剤が開発され、従来の激しい嘔吐はかなり緩和できるようになった。しかし、CDDP投与後24～48時間後に始まり、数日から1週間続く遷延性嘔気は、発生機序が未だ明らかでなく、薬物によるコントロールが期待できる状況にない。

欧米では、化学療法による嘔気・嘔吐に対して、漸進的筋弛緩法（PMR）や誘導イメージ法（GI）などの行動学的療法を用いた効果の検討が行われている。PMRやGIによって心身をリラクセーションさせることにより、化学療法による嘔気・嘔吐の軽減を図る試みを行っている。PMRやGIなどの行動学的療法は、欧米において看護のなかに盛んに取り入れられているが、わが国では技術習得の機会が少なく、臨床の場で実施しにくい状況がある。

本研究の目的は、臨床でよく実施されている足浴と足部マッサージを組み合わせた看護ケア（足浴後マッサージ）を用いて、足浴後マッサージがCDDPによる化学療法を受けた患者に対して、リラクセーション反応を生じさせ、遷延性嘔気を軽減させることを検証することである。

【方法ならびに成績】

1．研究1：足浴後マッサージによるリラクセーション反応に関する検証

対象は、がん専門病院に入院中でCDDPによる化学療法を受けた30歳以上の肺がん患者28名（男性19名、女性9名）である。CDDP投与後3～5日目に1日1回足浴後マッサージを行った（のべ57回）。足浴後マッサージの方法は、椅座位にて足浴を7分間行った後、ベッド上仰臥位で足部マッサージを片足10分ずつ計20分間行った。リラクセーション反応の指標として、①心電図R-R間隔（R-R間隔）、②R-R間隔のゆらぎ解析による0.15～0.40 Hzの高周波成分（HF）、③主観的評価を使用した。57例を分析した結果、⑴R-R間隔の平均値について、ケア前10分間の799.8 msec（ベースライン）と比較して、マッサージ中が892.2 msec、ケア後30分間が830.5 msecとR-R間隔は有意に延長していた（繰り返しのある一元配置分散分析後Dunnettの多重比較；前者p=0.000、後者p=0.006）。⑵HFの変化について、①足浴中からHFが増加；18例（31.6%）、②足浴中に変化はなく、マッサージ

中からHFが増加；14例（24.5%）、③足浴中にHFが減少、マッサージ中に増加；16例（28.1%）④ケア後にHFが増加；9例（15.8%）の4つのパターンに分類された。全例において、足浴中、マッサージ中、ケア後のいずれかの時期にHFの増加が認められた。(3)対象者全員が足浴後マッサージ中あるいは後に気持ちよさを表現していた。

2．研究2：足浴後マッサージによる遷延性嘔気軽減の有効性に関する検証

がん専門病院に入院中でCDDPによる化学療法を受けた30歳以上の肺がん男性患者（実験群24名、対照群21名）が自覚している遷延性嘔気の程度を比較した。実験群に対して、通常の看護ケア以外に、CDDP投与後3～5日目に1日1回足浴後マッサージを行った。足浴後マッサージの方法は研究1と同様である。対照群は通常の看護ケアのみを受けた。遷延性嘔気の指標として、100 mmの水平直線の主観的感覚尺度（VAS）を使用した（VAS値の結果はMedian（25%点、75%点）記載）。その結果、(1)実験群（75～92%）と対照群（69～84%）の遷延性嘔気の出現率に有意な差はなかった。(2)実験群におけるケア前のVAS値が14（0、26）mm、対照群が10（0、30）mmと有意差がなく、同程度の嘔気の強さであった。しかしケア後において、実験群のVAS値が1（0、15）mm、対照群が10（0、30）mmと2群間に有意差が認められた（Mann-WhitneyのU検定；P＝0.040）。(3)足浴後マッサージ後に嘔気のVAS値が増加した者はいなかった。さらに、足浴後マッサージによって、86%の者に嘔気のVAS値の軽減が認められた。

【総　括】

CDDPを含む化学療法を行った肺がん患者に対して、CDDP投与後3～5日目に足浴後マッサージを行った結果、足浴後マッサージを受けた者の全例にR-R間隔の延長、HFの増加というリラクセーション反応がみられ、8割以上の者に嘔気の軽減が認められ、足浴後マッサージは遷延性嘔気を軽減させるのに有効な看護ケアであることが示唆された。

足浴後マッサージは、リラクセーション反応により遷延性嘔気が軽減させることができる看護ケアとしてのエビデンスが見出せたと考えられる。また、実験群対象者の足浴後マッサージに対して肯定的な評価が多く、患者の意向にあった看護ケアであると考えられる。

以上から、臨床でよく実施されている足浴とマッサージを使用した看護ケアによって、化学療法による遷延性嘔気軽減の有効性を明らかにしたことは看護実践上の意義があると考える。

論文審査の結果の要旨

本研究は、化学療法における遷延性嘔気に関して、看護ケア（足浴後マッサージ）による軽減の有効性の検証を目的としたものである。

化学療法による遷延性嘔気は、制吐剤などによるコントロールが難しく、精神的要因の関与が考えられるため、遷延性嘔気に対する緩和ケアが必要であり、看護援助として、その役割を担うことができれば、看護の質の向上を図ることができるものである。

そこで、本研究では、シスプラチン製剤による化学療法を行った肺がん患者を対象にして、臨床でよく実施されている足浴とマッサージを組み合わせた看護ケアを使用し、遷延性嘔気に対する軽減の有効性の検討を行った。リラクセーション反応の生体指標として、心電図R-R間隔及び心電図R-R間隔のゆらぎ解析による高周波成分のデータを用いて、客観的にリラクセーション反応を評価した。さらに、対象者が自覚している嘔気の程度を実験群と対照群において比較検討を行った。

その結果、足浴後マッサージはリラクセーション反応を生じさせ、遷延性嘔気を軽減させることが示唆された。

本研究は、今後の発展性に期待できるものであり、がん看護への貢献度が極めて高い研究であるといえる。したがって、本研究は学位の授与に値すると認める。